『形勢逆転』/三題噺『・逆転　・遊び心　・狼男』

「ちょっとなにそのほっぺ！」
　驚いた声を上げる私を見て、頬を赤く腫らした灰が、ふわふわの耳を揺らして楽しそうに笑う。
　人間の体に狼の耳と尻尾をつけた彼は、私と同じ大学に通う同い年の灰。遊び人の狼男だ。
　一般的に狼は一途で浮気とは無縁とされている生き物ではあるが、遊び人な彼が一途な狼だなんて、私には到底思えなかった。
　本人曰く「俺は遊び心が強いだけ」らしい。
　どうやら頬を赤く腫らしているのも、ただの遊びだった女の子に本気になられてしまい、仲違いをして平手打ちを喰らったからとのこと。
　へらへらと語る灰に、私は呆れて溜息を吐く。
　狼の中では珍しい遊び心を持つ灰。そんな彼に密かに想いを寄せている私は、こういった彼の行動や発言に振り回されてはヤキモキさせられている。
　あーあ、彼が一途な狼だったらよかったのに。
「まぁもういいじゃんこの話は。てか、今日このあと暇？　遊び行かない？」
「あーごめん、私このあと鶴岡くんと約束あるから」
　そう言うと、先ほどまで笑顔を浮かべていた灰の表情が少し硬さを帯びた気がした。
「え……？　鶴岡？　なんで？」
「告白されたんだよね」
「……は？」
「でも私まだ鶴岡くんのことよく知らないしって言ったら、じゃあ試しにデートしてみようって話になって――」
　それに、「もしそれで鶴岡くんと上手くいけば、灰のことを諦められるかもしれない」という考えが私の中にはあった。もうこれ以上、苦しい想いをすることも無くなるんじゃないかという、そういった本心が。
　本心を隠した私の話を、灰は黙って聞いていた。相槌も何も発することなく。
「じゃあ、そろそろ時間だから」
　私は荷物を抱えてその場を去ろうと立ち上がる。
　歩き出そうと一歩踏み出した。その瞬間、突然腕を掴まれて体がよろめく。
　驚きながら振り返れば、焦った顔をした灰が不安げに瞳を揺らしながらこちらを見上げていた。
「行くな……ッ！」
　いつもとはかけ離れた様子の灰が発したその震えた声に、形勢逆転の気配を察知した私は、気づけば口角を釣り上げていた。